

「地域のひと・もの・こと」を教材とした人権教育がしたいな。

子どもたちが、人権について自分事として学べるといいな。



私たちの地域には老人福祉施設があるな。高齢者と交流しながら学習できるかも…。



人権教育リーフレット

いまここから

自分から

～地域教材をいかして～

学習の出発は「石段の穴」と「詩」

俺達の遊び場は
観音様の石段と決まっていたっけ
五人六人 皆弟や妹を背負って
草つきをして遊んだっけなあ
あの石段にあいている穴は
差別された 俺達の涙の穴だ
幸太・義公の嘆きの遊びの穴だ
俺達は何も知らぬ七・八軒が
何でみんなと遊べないのか
たまに友達の庭へ行けば
親達から わいらの来る所じゃねえと
追いかえされてなあ

(小林義雄氏「草つき穴」より抜粋)



〔第三次とりまとめ〕では、効果的な学習教材の選定・開発について、次のように示しています。

人権が尊重される社会づくりを自らの問題としてとらえ、自ら考えることができるようにするなどの教育効果を高めるため、身近な事柄を取り上げたり、児童生徒の興味・関心をいかしたりするといった教材の内容面での創意工夫を行う。

効果的な教材例として、「地域の教材化」「外部講師の講話やふれあいの教材化」「保護者や地域関係者と共に作る教材」「歴史的事象の教材化」「教材を通して、よりよい出会いをつくるための教材」などがあげられています。

N市内小学校の実践



この「草つき穴」を教材化して、中学校区の小・中学校全てで、地域の方に教えていただきながら学習していこう！

今から 90 年ほど前、被差別部落の子どもたちが、学校の友だちと一緒に遊ばず、観音様のある石段で、近くに生えている草をつみとって、石を使って草をおもちのようにつく遊び（草つき）をしていました。その跡が石段のいたるところに残っています。

先生方のねがい

- ①地域教材に出会い、ふれあう「**実体験**」を通して、はっとしたり、心をふるわせたりするような学習をしたい。
- ②日常的に起きているさまざまな事柄との「**つながり**」の中で、同和問題について考えていきたい。
- ③心情面の醸成を図りながら、時間をかけて「**じっくり**」学べるようにしたい。

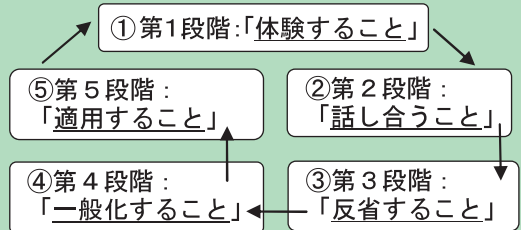


人権教育の指導方法の工夫

【第三次とりまとめ】「**体験的な学習**」に関して

個々の学習者の体験をはじめとして、他の学習者との協同作業としての「話し合い」、「反省」、「現実生活と関連させた思考」の段階を経て、「自己の行動や態度への適用」へと進んでいくと考えられます。

参考：「**体験的な学習**」に関する学習サイクル
(指導等の在り方編 P28)



キーワード

- ①**実体験** ②**つなげる** ③**じっくり**

① 実体験

「感じ、考え、行動する」学びへ

草つき穴を見学。草つきをやってみる。

どうしてこんなに大きな穴が空いたのかな？



草つきやってみただけど、1回、2回じゃ、こんな穴できないよ。



どうして、こんなにいじめられていたんだろう。



資料『草つき穴のお話』を読む。

実体験（見学）や、資料を読み語り合うことを通して、「よしお君たちは、かわいそうだ」「草つきは遊びじゃない！穴にくやしさをぶつけていたと思う」などと、当時、差別を受けた子どもたちの悲しみや苦しみに寄り添う姿がみられました。

② つなげる(自分と)

あの時、ぼくは…

もし私だったら…

「いじめや差別を生む心」を自分に照らして考える授業(4年生)

【学習のねらい】 自分の弱い心がいじめにつながっていることに気づくことができる。

資料「草つき穴」 H小学校 修正版(抜粋)

.....

(お弁当)

お弁当(今の給食)の時のことです。

今日のお湯くばり当番はよしお君とはる子さんです。よしお君は、やかんにお湯をくみ、配ぜん台にやかんを置いてみんなが並ぶのを待っていました。

「今日こそは、だれかお湯をもらいに来てくれるかなあ……」と、よしお君は心の中で思っていました。

ところが、はる子さんの前には長い列ができていのに、自分の前に並ぶのは、いつもこうた君だけです。……と、冷やかされたり、ばかにされたりしました。

しかし、あき子さんだけは、笑いもせず、じっとよしお君の様子を見ているのでした。

よしお君は、お湯当番が終わるとあまったお湯を捨ててに行くのでした。



語り合う場面

○あき子さんはよしお君のお湯をもらいませんでした。あき子さんはどんなことを思っているのだろう。

本当はもらいたい。でも、仲間はすしにされてしまうのが怖い。



お湯をもらったら、今度は私もいじめられるかも…。

クラスみんなに合わせるしかない。

ふり返る場面

○もし自分だったら……?

・私もお湯をもらえないかも。
・いじめられるのが怖いから、何もできない私。

どちらも自分

・差別やいじめをしてはいけない。
・声をかけてあげたい。

子どもたちは、あき子さんと自分の気持ちを重ねて考える(つなげる)中で、「差別・いじめをしてはいけないとわかっているが、周囲のことが気になって行動に移せそうにない」自分自身に気づいていきました。今後、自分と向き合い続けながら、クラスの中で、よりよい人間関係を作っていくとする意欲と実践力を醸成していく学習を積み重ねていきました。

また、子どもたちは、資料「草つき穴」に綴られている事実や背景に目を向ける中で、「差別の問題」を自分たちの身近にある人権課題として見つめはじめています。

正直な気持ちを見とどけ、差別・いじめを受けた側のよしお君が、なぜ学校に通い続けたのかを考えるという課題へつなげます。

草つき穴のお話

今から九十年ほど前のことです。H地区がまだH村とよばれていたころのことです。

これは、よしお君とこうた君が小学生だった時の実際のおはなしです。よしお君とこうた君は、六年間一度も席をかわったことがありませんでした。一番前はじっこで、いつも二人並んでいました。他の子どもたちの席はかわっても、よしお君とこうた君の席は六年間ずっとかわりませんでした。それは、クラスの友だちがよしお君やこうた君と並ぶのをいやがったからでした。

〈冬の朝〉

冬の寒い朝、教室に入ってきたよしお君は、みんながあたっている火ばちのそばにそっと近づきました。寒いので火ばち(昔のストーブ)にあたりたかったのです。すると、それを見たひろし君は、いつものように

「よしお、おまえはあたっちゃいけねえ! あっちへいけ!」と、言いました。

「おれたちといっしょにあたるなんて生意気だ!」と、たかお君も強く言いました。何か言いかけたよしお君ですが、下を向いて自分の席へもどって、すわっているしかありませんでした。後から来たこうた君もあたらせてもらえませんでした。

〈お弁当〉

お弁当(今の給食)の時のことです。

今日のお湯くばり当番はよしお君とはる子さんです。よしお君は、やかんにお湯をくみ、配ぜん台にやかんを置いてみんなが並ぶのを待っていました。

「今日こそは、だれかお湯をもらいに来てくれるかなあ・・・」と、

よしお君は心の中で思っていました。

ところが、はる子さんの前には長い列ができていて、自分の前に並ぶのは、いつもこうた君だけです。

「おい、よしお。売れねえなあ。もつとじょうずに売れや。」

「おまえのお湯は、きたなくて飲めねえや。」と、冷やかされたり、ばかにされたりしました。あちこちから小さな笑い声も聞こえてきました。

しかし、あき子さんだけは、笑いもせず、じっとよしお君の様子を見ているのでした。

よしお君は、お湯当番が終わるとあまったお湯を捨てに行くのでした。



〈まわりの人たちからも〉

差別されたのは友だちからだけではありません。席がえでほかの子を並べると、「先生、なぜうちの子をあの家の子と並ばせるんですか。並ばせてもらっては困ります。」と、よしお君とこうた君のとなりに並んだ子どもの家の人から文句が出ました。なので、他の子どもたちの席はかわっても、よしお君やこうた君の席は六年間変わらなかったのです。

学校の帰り道では、いつも待ちぶせされ、石を投げられたり、つばをはきかけられたりしました。家に帰ってから、友達の家をちよつとのぞくだけでも、「ここで遊んじゃいけねえ。あっちへ行け。」と言われ、友達の家の人に追い返されたこともありました。新野の神社で遊んでいても、子どもたちや大人たちから「おまえたちは神社で遊んじゃいけねえ。おほかへ行つて遊べ。」と、やはり追い返されてしまうのでした。

〈石段で〉

仕方なく、いつも近くのおほかにある観音(かんのん)様の石段で遊んでいました。そして、よしお君やこうた君ら子どもたちは、その場所をよく「草つき」という遊びをしました。近くに生えている草をつみとっては、石を使って草をおもちのようにつく遊びです。

「なんでおれたちだけ、いじめられるんだらう・・・」

「いつもいじめられてくやしいなあ・・・」

「学校へ行つてもいじめられるから、もう学校へは行きたくないなあ・・・」

よしお君やこうた君は、おたがいこんな話をしながら何年も何年も草つきをしました。そうしていつしか、その石段には、にぎりこぶしくらいの穴があきました。これが、「草つき穴」です。

〈大人になって〉

そんなくやしい思いをしながら、よしお君とこうた君は大人になりました。そして、同じく差別されていた七・八けんの家の人たちといっしょに差別がなくなるよう、みんなに根気強く話しをしました。そのうちに「差別はいけないことだ」と考える人が少しずつ増えてきました。

差別されてきた子どもたちは、お宮で遊ぶことができるようになり、かんのん様の石段で草つきをして遊ぶ子どもは、いなくなりました。しかし、今でも草つき穴は、私たちに、差別された人たちのつらさをかたりかけています。



② つなげる（地域の人と）

地域の中で差別と闘ってきた S さんからお話をお聞きしよう！



S さんのお話



当事者の実体験にふれる機会は、何よりも大切であり、学習の中で大きな転換点になります。

学ぶ姿勢や気持ちを十分に醸成してから臨みましょう。



- ・よしお君やこうた君は、毎日どんな気持ちで学校へ行ったのかな。
- ・大人になった二人は、どんな思いでいるのかな。



- ・よしお君やこうた君がいじめられても学校へ行き続けたのは、誰かが味方になってくれると信じていたからです。でも、他の人は見て見ぬふり。「助けてあげたい」と思っても、直接行動に出なかったら「助けてあげない」と同じです。何もしなかったら、いじめや差別をしていることと変わりありません。
- ・いじめや差別をしないのは当たり前のことです。みなさんは、いじめや差別を絶対に許さない人間になってください。そういう人間になってくれることで、あの「草つき穴」も喜んでくれると思います。
- ・今後、みなさんがどう行動にあらわしていくのか楽しみです。



- ・いじめや差別をされている人の気持ちになって考えるようにしたい。
- ・「草つき」をやり続けた二人の姿や気持ちを心に焼き付けておこう。



今の私は、差別やいじめをされている人を見ても動けません。でも、一歩踏み出して強い心になりたい。いじめや差別をなくしていく人になりたい。たとえ簡単ではないことだとしても、あきらめずに、強くなりたい。だから、もっと人権について学んでいきたいです。

③ じっくり

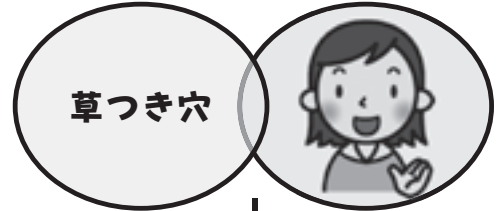
同じ教材で、学年に応じた学習を積み重ね、
人権感覚を高め、知的理解を深めましょう。

4年生から同じ教材を3年間かけて、じっくりと学習。そして中学校へ。

4年生

◎「草つき穴」の事実と背景について知る。【理解と認識】

- ・「草つき穴」へ行き、草つき遊びを体験してみる。
その後、お話資料を読み、穴が開いた由来を知る。
 - ・差別を受けても、学校へ通い続けた主人公の思いに気づく。
 - ・自分たちの中にあるいじめや差別する心に気づく。
- ※副教材：あけぼの「おらあ学校へ行ってえ」



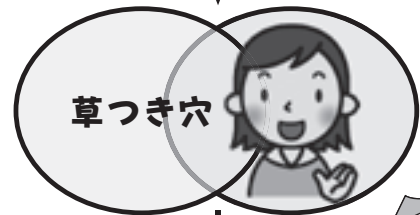
知的理解の深まり

人権感覚の高まり

5年生

◎「草つき穴」を語り継ぐ当事者と対話する。【共に生きる心】

- ・「草つき穴」をめぐる当事者の話を聞き、心の痛みや思いに共感する。
 - ・当事者の生き方にふれて、自分の生き方と照らし合わせて考える。
- ※副教材：あけぼの「やさしさを伝えるために」



6年生

◎「草つき穴」や「解放子ども会」を通じて、差別に立ち向かう態度や行動について考える。【意欲と実践力】

- ・お話資料（草つき穴）の差別に立ち向かう場面を読んだり、地域住民と力を合わせて差別をなくす「H覚醒会」の活動にふれたりしながら、具体的な態度や行動にどうつながれるか考える。
 - ・「解放子ども会」の活動や願いを知り、問題状況を変えようとする人権意識について学び、自分の生き方をふり返る。
- ※副教材：あけぼの「村人さえ無事ならば」「わたしの道をー高橋くら子の生き方ー」



中学校

◎部落差別の『部落』という言葉の意味について知り、「なぜ差別されるようになったのか」を歴史的な流れの中で学習する。

◎「『解放令』と被差別部落の人びと」について考える。

◎部落差別が今日まで続いている理由について考える。

◎部落差別をなくすために行動してきた人たちについて学習する。

◎結婚する際におこりうる部落差別について学習する。

◎現在も残る部落差別問題について学習する。



交流活動を通じた人権教育の推進

人権教育の中で考えられる交流活動

- 養護学校など異校種の交流 (人権教育指導資料集 P81 参照)
- 老人ホームなどお年寄りとの交流 (人権教育指導資料集 P74 参照)
- 障害者施設など障害者との交流 (人権教育指導資料集 P85 参照)
- 幼稚園・保育園など異年齢の交流
- 公民館など社会人や赤ちゃんとの交流 (人権教育指導資料集 P63 参照) など

交流活動で大切にしたい人権教育の視点 ~チェックしてみましょう~

◇継続的な活動にする

交流の回数を重ねていく度に、一人一人の個性が発揮されてきます。また、友達や交流する人との間に多少のトラブルが起きても、それを解決することでコミュニケーション力や連帯感が高まります。

◇活動の後、しっかりと褒める

活動後、褒めることが大事になります。誰かの役に立つことで喜ばれたり、褒められたりすることで自尊感情が高まります。

◇グループのリーダーを育てる

子どもは、素晴らしい個性を持っています。どの子どもも、リーダーになることによって「自分がやらなければ」と感じますし、ちょっとした支援があれば、グループをまとめることができます。新たな一面を見つけられると同時に子どもの自己肯定感を高めることにつながります。

◇グループのルールを決める

グループは一つの社会ですので、個々の子どもが安心して活動するためにはルールが必要です。自分たちの力でルールを決定していくプロセスを学ぶことで、規範意識を育てていくことができます。

◇異年齢交流では、下級生の意見を聞く機会を設ける

必要に応じて、上級生が下級生に意見を求める機会を設けましょう。仲間と合意形成していくことを自然に学び、話し合い活動も上手に進められるようになります。

◇子どもたちの力でチャレンジをさせる

活動にあたっては、できるだけ見守り、任せましょう。失敗しても責めず、できなかった理由を考え、試行錯誤しながら次回に生かすよう支援しましょう。何回もチャレンジして達成したときは、自尊感情が育まれます。

◇子どもが感じた素直な思いを大事にする

交流の中で感じる子どもたちの「素直な思い」を大事にしましょう。例えば、初めての交流の時に感じた怖さや不安といった思いがどこから生まれたのか考えてみるのもよいでしょう。また、自分たちの活動を振り返ることで、充実感・達成感・自己有用感を得ることができます。

◇交流の目的をはっきりする

交流活動は、行くことが目的ではありません。施設に行くことは、出発点あるいは通過点であることを意識したいものです。交流活動で感じたことや学んだことを、普段の暮らしの中にある人権問題などと関連付けて考えていくことが大事になります。



松本市児童生徒の人権教室

◆異年齢体験講座での交流

○思いを込めた字を習字で大きく表現しよう。

<内 容> 参加者が選んだ「一文字」に寄せる思いについて、異年齢同士で語り合い、認め合うことを通して、他者理解を深め、自尊感情を高める。

<参加者> 小学生17人、中学生6人、高校生（ボランティア）28人

<感想から>

- ・今までで一番楽しく書きました。こんなに堂々と書くことはなかったので楽しかったです。
- ・やさしく教えてもらって楽しくできて、うれしかった。



【第三次とりまとめ】

「異年齢交流」に関して

異年齢の子どもが共に活動する機会を整備していくことは、互いを思いやる感受性や社会性を伸ばすことにもつながり、人権尊重の精神を育てる上で意義深いことである。

◆異文化体験講座における放射能についての学習

○外国料理を教わりながら放射性物質と闘っている人たちのことを考えよう。

<内 容> 信州大学で研修している医師とそのご家族、チェルノブイリ、イラクの子どもたちの支援をしているNPOの方に外国料理を教わりながら、文化の違いや国の実状、福島現在の様子や支援活動について、お話を聞く。

<参加者> 小学生6人、中学生2人、一般（大人、保護者、教員）7人

<感想から>

- ・ボルシチやドラニキは、日本の料理と色も味も違って、食べていて楽しかったです。原発のことについても今日初めて知ったこともあり、勉強になりました。
- ・いろいろな方法で、福島、チェルノブイリ、イラクのことを、みんなの問題として広げていきたいと思えます。自分にできる事はやります。
- ・リカー先生、ありがとう。イラクに行ってもがんばってね。



【第三次とりまとめ】

「異文化交流」に関して

国際化の著しい進展を踏まえ、その教育活動全体を通じて、広い視野を持ち、異文化を尊重する態度や異なる習慣・文化を持った人々と共に生きていく態度を育成するための教育の充実を図る。